

第12回日本気象学会夏期特別セミナー（若手会夏の学校）の報告

第12回若手会夏の学校実行委員会*†

第12回日本気象学会夏期特別セミナー（若手会夏の学校）は、2000年7月14日（金）から16日（日）までの2泊3日の日程で、北海道千歳市支笏湖畔において、北海道大学（以下、北大と略す）が主管となって開催されました。かつては冬の学校という形で行われたことがあります。夏の学校としての北海道開催は今回が初めてとなりました。今年は、105名（学部生：9%、修士学生：45%、博士学生：30%、PD：2%、社会人：14%）の参加があり、修士課程の学生を中心に幅広い年齢層の方に集まって頂きました。例年の形式を継承しつつ今回は北大スペシャルと銘打ち、北大の先生方による招待講演をはじめ、分科会風の一般講演、そして、ポスターセッションという内容で行いました。講演して頂いた方（講演順：敬称略）、ポスターセッションの件数は以下の通りです。

●招待講演（1人90分/計4件）

塩谷雅人（北海道大学大学院地球環境科学研究科教授）：上層大気の水蒸気

太田幸雄（北海道大学大学院工学研究科教授）：大気エアロゾルの物理化学と放射特性

林 祥介（北海道大学大学院理学研究科教授）：気象力学と大循環モデルと情報化

上田 博（北海道大学大学院理学研究科助教授）*：メソ気象観測の楽しみと苦しみ

* 谷口 博、庭野将徳、藤井賢彦、江口菜穂（北海道大学大学院地球環境科学研究科）、篠田太郎、加藤雅也、橋本明弘、福田陽子、前坂 剛、吉田 聡、杉山耕一朗、本間晶子、茂木耕作、横山 誠、坪田敦緒、本間 晃、三浦優司（北海道大学大学院理学研究科）、藤本徳彦（北海道大学大学院工学研究科）、新井健一郎、馬場賢治、田中克佳（北海道大学低温科学研究所）、小高正嗣（東京大学大学院数理科学研究科）。

† e-mail : ymss-info@ep.sci.hokudai.ac.jp

* 現・名古屋大学大気水圏科学研究所教授。

© 2001 日本気象学会。

●一般講演（1人50分/計9件）

河本 望（NASDA/EORC）：南半球極渦内の下降速度の年々変動について

白井知子（NASDA/EORC）：対流圏/成層圏における大気中微量ハロカーボン類の濃度分布

小高正嗣（東京大学大学院数理科学研究科）：火星大気放射対流の2次元数値計算

渡辺征春（NASDA/EORC）：成層圏エアロゾル：気球・航空機搭載 OPC による直接 (in-situ) 観測

稲津 将（北海道大学大学院地球環境科学研究科）：熱源分布による亜熱帯ジェットの形成

荒川 理（気象研究所）：大気大循環モデルの再現するもの

本田明治（地球フロンティア研究システム）：冬季北半球大気循環場の年々変動の特性と季節依存性

久保田尚之（地球観測フロンティア研究システム）：熱帯西部太平洋で観測された積雲対流活動

日下博幸（電力中央研究所）：都市気象や異常気象を対象とした数値実験

●ポスターセッション（100分×2回/計35件）

（発表者割愛）

議論の活性化を目指し、例年と比べて各講演、発表の時間を多く取り、講演件数を大幅に増やしたのが今回の夏の学校の大きな特徴です。招待講演をお願いするにあたっては、参加者の意向に広く応えられるよう様々な分野から講演が聞けるよう配慮しました。これは、多種多様な分野の研究室が集まる北大ならではの演出であり、我々が掲げた本学校の柱でもありました。当日の講演では、講演者各々の専門分野にとどまること無く、気象学を志す若手研究者に向けたメッセージが多く語られたのが大変好評でした。特に、塩谷先生からは、データを眺めて考えることの面白さ、太田先生からは、エアロゾルが気候に与える影響の重要性、

林先生からは、気象力学のたどって来た歴史、誰にでも理解可能な形で情報・経験の共有化について、上田先生からは、御自身の観測史にはじまり、研究過程論、観測の面白さについて大変興味深い講演をして頂きました。

一般講演は、例年講演希望者が少ないため、講演応募締切前までに様々な講演依頼活動を行いました。夏の学校前の春の気象学会会場における交渉など、夏の学校という話題を通して多くの研究者の方々と広く交流できたのも、我々若手研究者にとっては貴重な経験でした。幸いにも例年以上に講演の応募があり、博士課程学生、PD、研究員など多方面、多年層の方から研究発表をして頂きました。今回は分科会形式で行い、複数の講演を並列してスケジュールに組み込むという方針を取りました。参加者の多種多様な趣味・意向に応えるべく取り組む一方、分野横断的な議論を深める機会を提供するにはいささか不十分であり、運営の難しさも痛感した次第です。今後も引き続きこの問題に取り組んで頂ければ幸いです。

ポスターセッションは、内容も多岐にわたり、夏の学校ならではの発表、議論に花が咲いたように思われます。講演者数は参加者の1/3にも達しました。見たところ、今回も一昨年の夏以来続くメソ降水機構への関心が引き続き高かったように思われます。また、ベストポスター賞の投票など例年にはない全員参加型の催しも好評でした。今後も続けて頂きたい企画の一つです。

講演・セッション以外の催しとして、北海道ならではのジンギスカンパーティーや毎年恒例の研究室紹介、支笏湖畔散策の時間や温泉の入浴など、楽しい交流の場も多く企画しました。これらをお目当てに参加された方もたくさんいらっしゃったのではないかと思います。

夏の学校参加者は年々低学年化が進む一方、100人を越える規模の運営が余儀なくされており、運営側にかかる負担は小さくはありません。この問題に関し、今回我々が新たに取り組んだのは、情報の電子化、申し込みの自動化でした。例年通り ymnet 等の各種メーリングリストを利用させて頂いただけではなく、web上でパンフレット、ポスター、報告書の配布、参加申し込み・確認が出来るようにすること、さらにそれらを自動化するために CGI (Common Gateway Interface) を利用するなど、運営負担の軽減化に取り組みました (<http://www.ep.sci.hokudai.ac.jp/~ymss/>)。特に、締切前に参加申し込み者を公開する方法は、幅広い年齢層の参加者を獲得するのに効果的であったように思われます。CGI の利用によりアンケートの収集なども web 上で効率的に行うことが出来ました。参加者アンケートでは、この新しいシステムに対して多くの参加者に賛同して頂きました。これは、運営に関する新たな成果であったと考えております。また、講演の内容(音声、OHP)を電子化(CD-ROM化)して配布する試みも行いました。これらの試みに際し、参加者の皆様、北大の関係者の皆様には多大なる労力を提供して頂きました。この場をお借りして深く感謝の意を表します。

2001年の日本気象学会夏期特別セミナーは、九州大学の主管で行われます。九州での夏の学校開催も初めての試みとなります。夏の学校の良き伝統を21世紀に引き継ぐべく、参加者が運営にいつそう協力する体制が進み、夏の学校が益々発展することを祈願いたします。

最後に、今回の夏の学校を開催するにあたって、日本気象学会講演企画委員会から援助を頂きました。講演に御協力頂いた皆様、参加者各位、日本気象学会講演企画委員会の皆様に深くお礼申し上げます。